

Title	二度語られた書評 : Twice-Told Talesを読んだポウ
Sub Title	Twice-Told review : Poe's reading of Twice-Told Tales
Author	巽, 孝之(Tatsumi, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.227(162)- 242(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0242

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二度語られた書評

—*Twice-Told Tales* を読んだポウ—

巽 孝 之

Edgar Allan Poe の手になる Nathaniel Hawthorne 第一短編集 *Twice-Told Tales* の書評は、ホーソン研究の古典ともポウ自身の小説理論の基礎とも位置づけられている¹⁾。

だが、あらためて当の書評を検証してみるなら、ことはそう単純には收拾されない。それには、正確なところ三種類のテキストがあるからだ。年代的に再確認すれば、ホーソンの『トワイズ・トールド・テールズ』は1837年に American Stationers' Campany から初版が、42年に増補再版が、そして51年に第三版が発売された。ポウは1849年10月に没したから、彼の対象は37年版・42年版のテキストに限ってよい。ところが、その書評の仕方がじつに奇妙きわまる。ポウの『トワイズ・トールド・テールズ』評は、*Graham's Magazine* 1842年4月号に第一の書評が、同誌同年翌月の5月号に第二の書評が、そして奇妙にも5年の間隔を経て、*Godey's Lady's Book* 1847年11月号に第三の書評が、それぞれ発表されているのである²⁾。つまり『トワイズ・トールド・テールズ』初版時ではなく増補再版時に第一書評が出るわけなので、事実上、ポウは同書増補再版というただひとつのテキストをめぐる三回も書評を加えたことになる。

ふつう、ひとりの人間がひとつの書物を三回も評することがあるだろうか。あるとすれば、いったいなぜ？ 同書をめぐるポウの反復行動は、ホーソンをめぐる不思議なこだわりを物語りつつ、反復そのものの不思議を歴史化していく。

三つの書評に支配的な文学原理が、きわめて図式化しやすい概念構成を持つことは、周知のとおりだ。第一書評から第二書評にかけて小説の必要条件とされる「多様性」(variety)「統一性」(unity)「独創性」(originality)。第三書評で明確化される「寓喩」(allegory)と「効果」(effect)の二元論、および前者に後者が優越するというヴィジョン。このわかりやすさを、ふつう我々はポウ自身の純粋なる文学思想の発露と読む。けれども、三つの書評の連鎖を読むほどに実感されるのは、必ずしも純理論的な観念ではなく、むしろ文学作品外の動機を持つ、かなり不純な構図のほうである。たとえば第一・第二書評に提示された三つの原理「多様性」「統一性」「独創性」はあくまでホーソンという作家を肯定するためのものだったのに、第三書評における「寓喩」と「効果」の対立項はあくまでホーソンを否定するために用いられている。まったく同一のテキストについて、はじめ肯定的だった書評がのちに否定的と化すこと——この趨勢には、どうしても一定の不純さと、その背景を演出したであろう政治的無意識がうかがわれてならない。

ここで、そもそも以上三つの書評がほんとうに書評の名に価するのかわかりかを検証してみよう。たとえば三頁にも満たない第一書評の第一パラグラフにはこんな但書が読まれる。

An accident deprived us, this month, of our customary space for review; and thus nipped in the bud a design long cherished of treating this subject in detail; taking Mr. Hawthorne's volumes as a text. In May we shall endeavor to carry out our intention. At present we are forced to be brief. (H, XI, 102, イタリクス引用者)

つまり第一書評で「ホーソン短編集を一例に取り上げつつ小説形式論
(148)

をやる」計画というのは、あらかじめ「紙面の都面の都合で」第二書評へ責任転嫁すべく目論まれていたのだ。それなら第二書評の現物はどうか。しかし、我々は以下のようなくだりを発見して目を疑う。

We said a few hurried words about Mr. Hawthorne in our last number with the design of speaking more fully in the present. *We are still, however, pressed for room*, and must necessarily discuss his volumes more briefly and more at random than their high merits deserve. (H, XI, 104, イタリクス引用者)

何とポウは、今号でも「依然スペースがつかまっている」ために「(同書二巻本の長所に見合わないほど簡潔かついかげんな発言にとどめなければならないこと」を弁解しているのだ。さらに第三書評に至って――

I must *defer* to the better opportunity of a volume now in hand, a full discussion of his individual pieces, and *hasten* to conclude this paper with a summary of his merits and demerits. (H, XIII, 154, イタリクス引用者)

ここでもポウはホーソン作品個々の評価については「もっと適当な機会に譲る」といい、「この作家の長所・短所のまとめを急ぐ」ことだけを考えている。驚くべきか呆れるべきか、三つの書評すべてにおいて、ポウは自分の書評が結局は純粋な意味での書評たりえない事実を告白してしまっているのだ。まとめれば、彼は「ホーソンをダンにして小説論をやる」と公約しておきながら、結局第二書評でも第三書評でも「ホーソンをダンにすることさえきちんと果たさなかった」ことになる。三つの書評を通じて顕在化するの、だから必ずしも高邁なる文学的理念の表明などではない、むしろポウがいちいち約束をしながら最終的にはのきなみ破棄してしまうという物理的「構造」の反復、これに尽きる。

II

ホーソン短編集のタイトル『トワイヌ・トールド・テールズ』をくりかえすように、ポウは同書への書評を二度くりかえした。

ここで“Twice-told Tales”という単語じたいが Shakespeare は *King John* (1595) 第三幕第四場、フランス皇太子がいう台詞「人生はありふれた話のように退屈なもの」“Life is as tedious as a twice-told tale / Vexing the dull ear of a drowsy man”の反復であった事実を思い出もよい。当初“twice-told”なる語は文字どおり「二度語られた」「反復された」(“narrated” or “related” twice) という意を持っていたのが (OED), このとき劇作家の任意により「退屈」「tedious」という形容詞が付されたためだろうか、以後は“twice-told”転じて即「ありふれた」「陳腐な」「hackneyed」という比喩的意味を、“twice-told tale”転じて即「語り古された物語」「ありふれた話」なる慣用的意味を帯びていく³⁾。

“Twice-told”という、何の変哲もない形容詞。ところが、その生成は、最初まったく任意であった記号と意味の関係が、反復を経てむしろ必然の仮面を被る歴史を典型的に表わす。この前提は、ポウ自身における「読むこと」の本質に迫る。では、ポウははたしてどのような「立場」に立ってテキストを読もうとしたのか？

ポウが第一書評と第二書評で反復しているひとつの意見を復習しよう。

Mr. Hawthorne's volumes appear to us misnamed in two respects. In the first place they should not have been called “Twice-Told Tales”—for this is a title which will not bear *repetition*. If in the first collected edition they were twice-told, of course now they are thrice told. May we live to hear them told a hundred times!

(H, XI, 102-103)

ポウはまず“Twice-told”を含むタイトルがいかに反復に耐えぬ下手な

(150)

ものであるかを述べ、それにつづけて“Tale”に関する形式論を展開している。彼によれば、『トワイス・トールド・テールズ』と銘打つかぎり、ここには「短い物語」「tale」が収められていて当然のはずだが、じっさい読んでみると“Sights from a Steeple”や“Little Annie’s Ramble,” “Foot-prints on the Sea-shore”など、「随想」「essay」と呼べそうなものが多すぎるのだ。第一・第二書評でのポウは、作品内容からするかぎりホーソンの天才を積極的に認めつつも、惜しいかな短編集の顔ともいべき書名「トワイス・トールド・テールズ」のほうは、「トワイス・トールド」にしても「テールズ」にしても何とも場違いであることを指摘するのである。

この時点で注目されるのは、ポウ自身は“twice-told”をすぐさま慣用的・比喩的に「ありふれた話」と解釈するような、いわばそれ自体ありふれた読みかたを決してしてはいない事実だろう。彼はこの表現を字義的に、それこそ「二度語られた」という意味で読解する。ある人々は“twice-told”をあくまで比喩的に「語り古された」と読んだため本短編集を「買いあぐねた」⁴⁾のだったが、ポウの場合、むしろあくまでこれを逐語的に「二度語られた」と読むために、そこに潜む論理からするとホーソンは「タイトルを付けまちがえている」「misnamed」と結論するしかない。

ただしポウはアイロニーの言語を駆使しているのではない，“twice-told”という単語における逐語性と比喩性の分裂に注目して、むしろ言語のアイロニーを露呈させようと試みたのだ。そしてこう考えてはじめて、ポウ自身の「読むときの立場」は頭をもたげてこよう。彼は慣用的の意味よりも逐語の意味を選んだが、それはべつだん訓古学趣味でもなければ揚げ足取りでもない、彼は“twice-told”の言語的効果だけにこだわったにすぎない。「二度語られた物語」というタイトルの本が増補再版すれば「三度語られた」“thrice told” (H, XI, 103) ことになり、以後再版するごとにタイトルを変更しなければならない、ゆえにホーソンは命名する際に効果を読みまちがえている、というのが彼の主張だ。

言葉の意味ではなく言葉の効果を読みつむぐこのとき、たとえば名詩

“The Raven” (1845) のリフレイン “nevermore” が決定されたのは、その意味ではなくその言語的音響に、及び詩というジャンルの内的論理に鑑みてのことであった事情が想起される。ポウのホーソン書評にしても同じことだ。彼は書物というジャンルに必然的な再版という効果と、それに伴う内的論理に着目して「トワイス・トールド・テールズ」というタイトルに落第点を与えたのではないか。そして、そのような洞察を可能にした「読むときの立場」は、作家でも文学批評でもない、ほかならぬ編集者／ジャーナリストの立場ではなかったか。

ひとつのリフレインがじゅうぶんセンセーショナルかどうか、ひとつのタイトルがじゅうぶん商業的かどうか——それを評価するポウの顔は、字義的にも比喩的にも作品を「買う」職業人のものであった。『トワイス・トールド・テールズ』のタイトルを読んだポウは、批評家としてこれを買えない＝評価できないという以上に、何よりも編集者として文字どおり買えない＝商売の対象にならないという見解を表明したのである。

ポウが当時の雑誌文学制度にどっぷり漬かっていたことは、言うを俟たない。市場経済勃興期であった一九世紀初頭のアメリカは文学産業の開花期にも相当し、マガジニズムはその花形だった。当時の作家にあっては、単に自ら書きたいものを書くというよりも、むしろ雑誌それぞれの傾向や読者層やフォーマットに準じて書かされるという一種の価値転倒こそ所与の現実であり、げんに編集者ポウも “Marginalia” と総称される穴埋め原稿を書きまくっている。だが、いま重視したいのは、マガジニズムがさらに、雑誌初出・単行本再録という制度をいっそう促進した点だ。これは、ポウのみならずホーソンにもいえよう。彼もまた、ポウとはちがうマーケットながら *Salem Gazette* ほかの新聞・雑誌メディア初出の作品群を、あとで『トワイス・トールド・テールズ』に再録するという手続きを踏んだからである。したがって、編集者としてのポウが “twice-told” を文字どおりに読んでみせたとき、彼はそこに雑誌初出・単行本再録の含意を前提していた。ポウの編集感覚は、これら「二度語られた作品」を「二度印刷された作品」 “twice-printed tales” としても読み、いったい作品は二

度印刷されることでいったい何を演じるか、この一点に留意したと推測される。

そもそもポウその人が、推理小説第二作 “The Mystery of Marie Roget” (1842) 雑誌連載中に自らの推理の誤謬に気づき、あちこちに足を運んで取材してから最終回を曖昧化したばかりか、短編集再録時には、いかにも最初から自分の推理が初回よりの中していたかのように長い脚注さえ加筆した経歴を持つ。反復すること、再録＝二度印刷することは、ポウにとって因果転倒と同時に表面上の傷や矛盾を取り繕う、まさしく編集者のレトリック発揮の場であった。

そのような視点から第二書評を読みなおすと、ひとつ気になる箇所が浮上する。ホーソンは “Howe’s Masquerade” という短編を *Democratic Review* 1838年5月号に発表したけれども、それを1843年増補再版した『トワイス・トールド・テールズ』の第二巻へ再録している。さて、ポウによる同書への第二書評には、この短編がポウ作品の剽窃といえなくもない、と指摘している部分がある。もちろん第二書評までは彼は作家ホーソンに肯定的だから、かなりやんわりした口調で。 “In ‘Howe’s Masquerade,’ we observe something which resembles plagiarism—but which may be a very flattering coincidence of thought” (H, XI, 102-103 イタリクス引用者)。つまり、ポウは自分の “William Wilson” (1839年) をホーソンが「ハウ総督の仮面舞踏会」で剽窃した、というのである。人物の衣装にせよ、最終的に決闘へ至る筋書にせよ、そっくりであると。けれども、これがとんだ言いがかりであり、かつ言いがかりでしかないのは明らかだ。というのも、「ハウ総督の仮面舞踏会」初出版の執筆は1838年だから、いうまでもなく「ウィリアム・ウィルソン」に一年も先行しており、たまたま二度目に印刷＝短編集に再録されたのが「ウィリアム・ウィルソン」より三年後、1843年だったにすぎない。事実関係からすれば、ポウはホーソン作品の初出時期を知ってか知らずか、とにかく無視することで、この相手を盗作者として誹謗したことになる。二度印刷されるというのは、少なくともポウにとって、初出の時期を忘却しつつ因果関係を崩

し、自作の商品価値を増大させる効果さえ合わせ持っていた。⁵⁾

Ⅲ

では、文学的商品価値をポウの秘めたる批評基準と仮定するとき、第二書評で彼が持ち出す「(思想の) 独創性」「(ジャンルの) 多様性」「(効果の) 統一性」という三大原理は、どのように読みなおせるか。

まず「独創性」。ポウは彼自身が「小説というよりはエッセイ」と呼んだ「尖塔からの眺め」その他にある種の「落ち着き」「*repose*」を認める。彼自身の「効果の統一」理論からすれば批判されてしかるべき要素だが、第二書評の段階では彼はまだこの側面を善意に解釈している。“*Yet this repose may exist simultaneously with high originality of thought; and Mr. Hawthorne has demonstrated the fact. At every turn we meet with novel combinations; yet these combinations never surpass the limits of the quiet*” (H, XI, 105, イタリクス引用者)。このような「落ち着き」こそは、「新奇な組み合わせ」「*novel combinations*」に代表される「独創性」と並存するものであり、やがて我々が読み進むうちに、かつこれほど明瞭な思想は生まれたことも示されたこともなかったんじゃないかという静かな驚き“*a calm astonishment that ideas so apparently obvious have never occurred or presented to us before*”

(*Ibid.*) をもたらす。独創性、それは抽象的な文学原理どころか読者に具体的にアピールする新奇な想像力の効果にはかならない。作品世界があくまで読者にとって斬新であるかどうか、盗品でないかどうか——独創性は、その一点を測る編集出版上の倫理的要請に近い。

つぎに「統一性」について、ポウは効果ないし印象の統一性に絞ってこう説明する。“*...this unity cannot be thoroughly preserved in productions whose perusal cannot be completed at one sitting*” (H, XI, 106)。この前段で、ポウは神経を集中できる読書時間を一時間と特定しているが、ここにうかがわれるのもまた、読者への意識転じて文学市場への意識であろう。文学が商品たりうるために読者を惹きつけて放さないだけ

の短さと、それに伴うべき読後感としての印象の統一に配慮すること、これは文学の人間工学をふまえた編集条件といえる。

さらに「多様性」について。これは、第一書評冒頭で提出された「短編は詩よりも有利である」^{テイル}「It (the Tale) has even points of superiority over the poem」(H, XI, 102) という命題と関係深い。ポウによれば、美を扱う詩は韻律という枷をはめられるために変化をつけにくい、いっぽう真実を扱う散文は、その枷がないぶんだけ無限に種類を増やすことができる。詩と比べて、小説は形式上いくらでもそのサブジャンルを多様化させていける、という。このようにポウが考えた根拠はにわかにはつかみがたいが、第二書評が書かれた1842年当時といえば彼がちょうど創作の比重を詩から小説へ移していたころだ。同年一月に愛妻ヴァージニアの咯血により生活も困窮をきわめはじめたという伝記的事実を重んじることも、1833年「MS in A Bottle」で懸賞小説に最初の当選を果たした彼は、単純に詩よりも小説のほうがカネになると思いはじめたのではないかと見ることが可能だろう。いずれにしても、小説の多様性を享受するポウの筆には、美学理論のみならず商品理論そのものが着色されていた。

以上三つの文学原理は、ゆえに編集者ポウが作家ホーソンの文学的商品価値を判断するための道具だったのである。そして当初のポウは、ホーソンの「多様性」については留保しつつも、彼の「独創性」と「統一性」については申しぶんなしと述べ、その天才についてほとんど手放しの褒めようなのだ。

“The subjects are insufficiently varied. ...But ...t[^T]he style is purity itself. Force abounds. High imagination gleams from every page. Mr. Hawthorne is a man of the truest genius” (H, XI, 113).

だからこそ——このように第一・第二書評においてはポウがホーソンに高い評価を与えているからこそ——我々は第三書評における辛辣なる評価

への豹変ぶりに、そこはかたない不思議を感じてしまう。

では、ポウ書評はどのように百八十度転換したか。まず「獨創性」概念が再吟味される。彼は第二書評ではホーソンの獨創性に積極的評価を与えていたが、第三書評になるとホーソンには最初から獨創性などなかった、とでもいいかげんなトーンに変わる。このようなアクロバットを可能ならしめたのは、ポウがここで獨創性と似て非なる概念「特異性」「peculiarity」を持ちだし、むしろこちらのほうこそホーソンの特徴としてふさわしいと決断していく手順であった。

They regard as original in letters, only such combinations of thought, of incident and so forth, as are, in fact, absolutely novel. ...Originality, thus understood, tasks and startles the intellect, and so brings into undue action the faculties to which, in the lighther literature, we least appeal...it cannot fail to prove unpopular with the masses...But the true originality...is that which...combines with the pleasurable effect of apparent novelty, a real egoistic delight' (H, XIII, 145-146)

通としての知識人ばかりにわかる新奇さではなく、いかにも新奇と見える新奇さを表現すること。たとえそれが見かけ倒しの新奇さであっても、わかりやすくさえあれば、読者大衆はそれを作者の獨創であるばかりでなく自分たち読者の獨創でもあると考えるようになる(同頁)。ここに、編集者ポウのマスマーケット戦略がある。そしてこれを基準とするならば、ホーソンにはそのように商品価値のある獨創性はない、単に特異性があるだけだ。そして特異性とは単調さの別名であるがゆえに、ホーソンは決して幅広い人気を勝ち得ることができないのだ、とポウは宣告する。

前述のとおり、彼は獨創性と統一性を連関させて捉え、多様性を実現するために単調さを何よりも嫌っていたから、ここでポウがホーソンは獨創的ならずと断定したのは、とりもなおさず第二書評までのホーソン評価と(156)

ともに、そこで彼が提起した文学原理までも全面撤回したことを意味している。

IV

かくして、ポウは独創性・統一性・多様性など、第二書評で確立したこれらの文学原理を抜本的に修正する必要に迫られた。その成果が、第三評で編み出された「寓喩」と「効果」の二大原理である。ホーソンにあるのは独創性ならぬ特異性であり、特異性は単調さを免れず、そうしたメカニズムの要因はすべてホーソンの寓喩趣味にある、と拮据する恐るべき三段論法。そのあげく、ホーソンの寓喩的な書きかたこそは作品の効果を薄める元凶と考えるポウは、このように断定した。“Under the best circumstances, it (=allegory) must always interfere with that unity of effect which to the artist, is worth all the allegory in the world”

(H, XIII, 148). これは、ポウが Bulwer-Lytton 卿の文体を「手のつけられぬメタファー気狂い」「an absolute mania of metaphor” (H, X, 130) と批判した事情にも通底しよう。

ただし、ホーソンへの評価が一八〇度転換したからといって、ポウその人のマガジニズムの理念までが根本から転覆したわけではなかった。すでに第一・第二書評において、ポウは“twice-told tales”を「二度語られた話」と文字どおりに読むことにより、「言語の効果」に着目している。そして、この点を意識したからこそ、ポウはこの短編集の増補再版を指して「二度ならず三度語られた＝印刷された物語」と皮肉ったばかりか、自らその構造を反復して「二度ならず三度語られた書評」に手を染めたのではなかったか。すなわち、もともと第一・第二書評の時点から潜在していた言語の「効果」への興味が第三書評に至って顕在化し、その瞬間、それはホーソンを斬るための絶好の武器と化したのではなかったろうか。

そのときに効果原理を一気に浮上させた文脈の正体こそ、本論の最終的な標的である。具体的には、第一・第二書評が書かれた1842年と第三書評の書かれた1847年の間に、何らかの決定的事件が介在したのだと思われる

——それも、必ずしも美学的ではなく、むしろ政治的とさえ呼べるような。

V

1845年いわゆる〈ポウ vs ロングフェロー論争〉（“The Longfellow War”）⁶⁾が起こった。この論争は、ポウが Henry Wadsworth Longfellow のアンソロジー *Waif* を批判した *Evening Mirror* 誌1845年1月14日号にはじまり、彼の論争終結宣言が載る *Broadway Journal* の同年4月5日号までつづく。ポウ側の批判の論旨は、相も変わらぬ詩人の盗作批判なのだが、この論争においてじっさいポウの相手をしたロングフェローならぬ「ウーティス」(Outis, ギリシャ語で no one) と名乗る論客がなかなかの強者だったため、ポウは自説をゆるめる必要にかられ「独創性と盗作癖というのは、じつは容易にはみわけがたい」という論旨へ移行するまでに譲歩する。

The poet is ...possessed by another's thought, and cannot be said to take of it, possession. But, in either view, he thoroughly feels it as his own—and this feeling is counteracted only by the sensible presence of its true, palpable origin in the volume from which he has derived it—and origin which, in the long lapse of years it is almost impossible not to forget—for in the meantime the thought itself is forgotten. (H, XII, 106)

詩人は他者の考えに取り憑かれるあまり、やがてそれが自分の所有物であるかのように思いはじめ、出典さえ忘却してしまうこと——ここでの詩人と他者の関係論を焼き直したのが、じつは先ほど検討された第三書評における真に独創的な作家と一般読者の関係論だったというわけだ。

もうひとつの要点として、ポウがロングフェローの教訓癖を寓喩志向の別名とみなしつつ批判している部分も見逃せない。 “It will be at once
(158)

evident that, imbued with the peculiar spirit of German song (a pure conventionality) he regards the inculcation of a moral as essential. ...But didacticism is the prevalent tone of his song” (H, XI, 69)。こうした教訓癖批判が、やがてホーソン作品における寓喩への批判というかたちで再現されていく。

当時のロングフェローといったらアメリカ文壇そのものの化身である。いわゆる「お上品な伝統」を担い「ボストン知識人^{ブローコックス}」の典型としてハーヴァード大学教授という地位も得ていたこの「文壇の中心」は、さらに自分の位置するニューイングランド地方を問わず「文学の中心」と思わせる中央集権幻想の再生産者だった。そして、ロングフェロー周辺の作家たちが、まさしくその保守的傾向のために、結局ヨーロッパの模倣に終始しているように見えたのもたしかなことであった。この状況が、たとえばポウのように、当時アメリカ国民文学の確立と、その実現のための本格的な文学批評の樹立を目論んでいた作家にとって、きわめていらだたしい事態と映ったのは想像に難くない⁷⁾。彼が一個の文学作品が独創的か盗作的かということに神経を悩ませたのは、いわばアメリカ国民文学一般の独創性を願うがゆえのことだったのである。

したがって、対ロングフェロー論争を経たポウは、ホーソンさえ論敵周辺の人物として見るようになっていたのだ。ここで、ホーソン作品の古典的地位じたいが、まさに文学的必然というより文壇的偶然であったかもしれないとする意見は傾聴に値しよう。Jane Tompkins は、その傍証として、たとえば1836年以降のホーソン売り出しに際し当時いちばん権威のあった年刊 *The Token* 誌の編集長 Samuel Goodrich がいかに尽力したか、たとえば37年版『トワイス・トールド・テールズ』が高い評価を得るに際し編集者はじめ、それこそホーソンとは Bowdoin 大学でクラスメートだった大御所ロングフェロー当人がいかに協力したかを挙げている⁸⁾。ポウが看破したのは、まさにそのような東部文壇の政治網そのものであった。かくして第三書評末尾に至り、彼はこのように絶叫する。

Let him (=Hawthorne) mend his pen, get a bottle of visible ink, come out from the Old Manse, cut Mr. Alcott, hang (if possible) the editor of 'The Dial,' and throw out of the window to the pigs all his odd numbers of 'The North American Review.' (H, XIII, 155)

ここでのボウは、ホーソンを叩くその同じ手でロングフェローら保守主義者もエマソンら革新主義者も一気に叩き、ニューイングランド中心の北米文壇を一挙に壊滅させようと試みている。むろん、今日の読者は芸術至上主義者ボウを前提とするあまりに、上の一節に違和感を覚える向きも多いただろう。それは、もはやこのくだりに対して、当時の読者が持ちえたような同時代的共感を覚えられないという事情に拠るだろう。にもかかわらず、アメリカ文学における言語的効果を唱道したボウが、この結末でアメリカ文壇における同時代ならではの政治的効果を想定していなかったとは考えにくい。彼の純美学的な文学原理は反復される＝二度語られることで分解し、政治的修正を余儀なくされたが、それを「twice-told」という記号の演技として辿りなおすことは、逆に雑誌文学ジャーナリスト・ボウにおける文壇批判が、いかに彼の文学批評の本質と相互交渉するものであったか、その二重性を再考する機会を導く。エドガー・アラン・ボウが「寓喩よりも効果」へ向けて美的再表現を構築する姿勢じたい、すでにして寓喩＝教訓癖過剰なほどの政治的再編集を経た結果である可能性は、このような視点を得てこそ洞察されるのではあるまいか。

Notes

- 1) Cf. J. Donald Crowley, *Hawthorne: The Critical Heritage* (London: Routledge and Kegan Paul, 1970), 18. なお、ホーソンのテキストは以下の全集版に拠る。William Charvat, Roy H. Pearce, and Claude M. Simpson, eds., *The Centenary Edition of Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus: Ohio State University Press, 1963-).
- 2) ボウのテキストは以下の全集版とし、略称Hと巻数・頁数を併記する。James

A. Harrison, ed., *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, 17 vols. (New York: Crowell, 1902; 3rd ed., New York: AMS, 1979).

- 3) クロウリーによれば、“Twice-told tales” というタイトルに含まれているのはホーソンの謙譲ばかりではない。“There is in the reference his customary self-deprecatory tone, but there is as well an expression of his urge to make his readers aware of the possibilities of imaginative experience” (*Centenary Edition*, 532).
- 4) ホーソンの大学時代の友人だった批評家 Horatio Bridge は、作家自身に宛てた手紙にこんなコメントを残している(1837年3月28日付)。“Your book will do good, if the papers are cold about it. Most of the coldness is due to the fact that the stories are ‘Twice-Told;’ and this I know from remarks of some of my friends, who declined buying because the book was not original.” Julian Hawthorne, *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography* (1885; rpt., Boston: Houghton Mifflin, 1892), I, 153.
- 5) ポウは『トワイス・ワールド・テールズ』増補再版を「三度語られた物語」と形容して揶揄したが、じつはホーソンの同書収録短編“The Gentle Boy” (1831年 *The Token* 初出)は1839年に別刷りパンフレットとしても自費出版されており、すでにそのときのサブタイトルが“A Thrice Told Tale”と読める。ポウ書評における揶揄の文句じたいが、皮肉にもホーソン自身が(自己卑下的に?)先取りしたものであった。E. Frazer Clark Jr., ed., *Nathaniel Hawthorne: A Descriptive Bibliography* (University of Pittsburgh Press, 1978), 14-16. Cf. Robert Regan, “Hawthorne’s Plagiarist; Poe’s Duplicity,” *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 25, No. 3 (December 1970), 296.
- 6) この論争の経緯を最も詳細に考察した文献として、以下のものがある。一力秀雄「怒れるポー——いわゆる Longfellow War について」、『人文論集』(早稲田法学会) 2号 (1965年1月), 71-99頁。
- 7) ポウはちょうどロングフェロー論争と重なる1845年10月16日に、偶然 Boston Lyceum に招かれて“The Raven”の朗読会を行なっているのだが、その折の発言でも、自分がボストンに生まれたことを恥じてみせるとともに、ロングフェロー批判の正しさを誇って譲らなかった。Sidney P. Moss, *Poe’s Literary Battles: The Critic in the Context of His Literary Milieu* (1963; rpt., Carbondale: Southern Illinois University Press, 1969), 132-202. なお、本稿脱稿後に入手したため参考にはできなかったが(〔付記〕参照)、同一の点について別の視点より正統的な分析を加えたものに、以下の論文がある。松山信直「Poe と Hawthorne の関係」(『同志社大学英

語英文学研究』47～5)号=1989年3月・10月・1990年1月号に3回分載〔47・48は合併号〕。

- 8) Jane Tompkins, *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction: 1790-1860* (New York: Oxford University Press, 1985), 8～9.

〔付記〕 本稿の発想は、1986年8月、弓書房刊行の教科書 *The World of Edgar Allan Poe* のため、ポウ論文への注釈に従事していた折に獲得された（同年10月出版の同書収録 “Twice-Told Tales” 及び注釈部分91—97頁を参照）。その注釈は、のちに筆者が1987年8月米国コーネル大学に提出した博士号請求論文の第二章に発展し (*Disfiguration of Genres: A Reading in the Rhetoric of Edgar Allan Poe*, UMI 請求番号 8725822), それに準拠した日本語版草稿が同年11月21日（土）、日本アメリカ文学会東京支部月例会（於・慶応義塾大学三田校舎）での口頭発表で読まれている。前掲注釈書の筆頭編者・刈田元司教授とともに、論文指導・最終審査にあたった Jonathan Culler, Cynthia Chase, Debra Fried の各教授に感謝したい。とりわけ Fried 教授の助言がなければ、筆者の *disfigurative* な着想が *New Historicism* の展開を採ることはありえなかった。また、前掲口頭発表直後に質疑応答に参加して下さった諸兄姉に深謝したい。諸兄姉の適切な御意見に啓発されていなければ、何よりも本稿がこのように「二度語られる」ことはありえなかった。